

京都府推進委員会委員長（京都府知事）賞
犯罪と非行と愛

京都府・京都共栄学園中学校 一年 増茂 まさも 全 ぜん

「あなたの家に帰って、あなたの家族を愛してあげてください。」
 これは世界平和のために何をしたらいいのかという問いかけに答えたマザーテレサの言葉です。僕はこの言葉をお母さんに教えてもらった時犯罪や非行の根本的な原因が、家族の愛情の不足にあるのではないかと考えました。

僕はお父さんと六歳の時に家族になりました。生まれてからはお母さんと二人でくらしてましたが、お母さんも周りの人も沢山の愛情をくれて、二人でくらして、一度もさびしい想いをしたことはありませんでした。お父さんと家族になっても色々な場所に行ったり、犬を飼い始めたり、新しい友達や親戚も増えて、僕は幸せだと心から感じています。

愛情の量は計れませんが、家庭内が愛に満ちていると自然と他の人にも優しく接することができるんじゃないでしょうか。反対に、それが不足しているとイジワルをしたり人を困らせるようなことをする子が多いように感じます。僕はこのことをどうやって解決できるかと考えましたが、小さなころからしっかりと愛情を注いで大人になるまでその子にしっかりと向き合えばいいのだと思います。

僕は、いつも両親から愛情を注がれているなと感じています。例えば、僕は小学生の頃不登校生でした。「学校に行きたくない」という僕の気持ちを両親はしっかりと受け止め、聞いてくれました。「学校に行くのは当たり前でしょー!」という大人が多い中で、お父さんもお母さんも僕の気持ちを一番大切にしてくれました。

そして学校に行かなくなった僕は、お父さんの仕事と一緒に

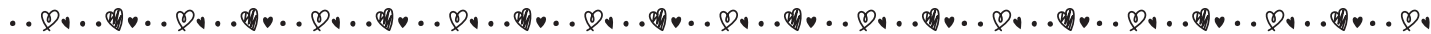
ていくようになりました。日本中を回って自然環境再生の仕事をしているお父さんと、お母さんと一緒に様々な地域でお手伝いをしました。「中学受験をしたい」と言った時も、全面的に応援してくれました。経済的に支えてくれて、僕が本気でやりたいと思ったことには、ちゃんと理解してくれてサポートしてくれます。

それでは逆に愛情を注がれない子どもは、どんな環境にいるのでしょうか。たとえば、親がいなかったり、いつも暴力を振るわっていたり。親自身が育った環境も大きく関係し、その負の連鎖が繋がっていく。愛情を注がない親の子どもも多くが、寂しさを抱えて生きているように思います。

しかし親がいなくても、施設で育っても、真っ直ぐに愛情深く育つ子もいるそうです。それは何故なのでしょう。僕のお母さんは障害を持つ子どもたちの療育をしていた時期があり、児童養護施設や乳児院など社会的養護が必要な子どもたちの勉強をしていました。お母さんが教えてくれたのは「ずっと施設で育っても、居場所がある子は愛をしっかりと受け取ったり誰かに優しくできる子になる。例えば血のつながりがなくても、兄弟や親子になれるし、そこが家族という居場所になるんだよ」ということでした。僕は家族とは、お父さんがいてお母さんがいて子どもがいてという、そういった形のことだと思ってましたが、血のつながりも年齢も性別も関係なく、そこにちゃんと一人一人の居場所があって、愛があったら、それはもう家族なんだと思いました。これは一つの家族の話ですが、この一つ一つの家族が繋がって地域が作られて、社会が作られていくと考えると、マザーテレサの言った言葉がどれほど大切なことがわかります。

最後に、僕は今まで、犯罪や非行についてしっかりと考えたことはありませんでした。今回お母さんに話を聞きながら、自分とは異なる家庭環境のことを考えることができました。

家族というそれぞれの一番身近な人を愛すること。ある人には簡



単なことでも、ある人には難しいかもしれません。けれどそのことを何よりも大切にするのが、社会を明るくし、犯罪や非行を防止する一番の近道だと考えています。



過ちを犯してしまった人の立ち直ろうとする頑張りを応援しよう！



京都府推進委員会委員長（京都府知事）賞 感謝の言葉と寄りそう気持ち

京都府・京都市立加茂川中学校 一年 杉 ^{すま}いおり

「ありがとうございます。」それあなたのすぐ近くとところだね。感謝の気持ちを言葉にすること、人の良いところを見つけて伝えること、日常の小さなことかもしれないが、私がいつも大切にしていることだ。私が自然とそうするようになったのは、母の影響が大きい。母は初対面でもお構いなし。よく言えば人懐っこいお世話好き。悪く言えばお節介。とにかくオープンな心を持ち、人が好き。地域の「コンビニでも、レジで必ず最後に」「ありがとう。」と言つ。お店でいい接客をしている店員がいたら「素敵なお客ですね。ありがとう。また来ます。」と必ず声をかける。だから自然とすぐに打ち解けて、すぐに覚えられる常連さんになるのだ。おかげさまで私もすっかり近所のお店の方たちに覚えられ声をかけられる毎日だ。

夏休みに家族旅行に出かけた際、電車が止まって車いすの外国人ファミリーが私のいた車両に乗ってきた。五人家族で駅員さんもサポートして車椅子を誘導する。しかし、いざ乗車になった際に、車椅子が電車にうまく乗りきらない。私が「大丈夫かな？」なんて考えているより先に、母が走って行って一緒に車椅子を介助していた。姉と変わらず「えっ？早。」と突っ込んだほどだ。母の行動力にはいつも驚かされる。そして無事に乗れた後、英語で少し話をして笑顔で手を振っていた。その後に母が「無事に乗れて良かったわあ。彼らも楽しい旅ができたらしいね。」と笑っていて、私もなんだか嬉しくなった。いい旅の始まりだった。

「ホスピタリティ」という言葉、これもよく母との会話から耳にする言葉だ。ホスピタリティとは人が人にする「おもいやり」や「心からのおもてなし」のことを言つそつだ。これは、人を感動させる

だけではなく、安心させたり、人の心をほぐす効果もあるというのだ。色々な人が共に暮らす社会であるからこそ、手を差し伸べる優しさや、思いやり、ホッとさせるおもてなしは必要なのではないかと思う。

私も学校でとても困った時に、友人の優しさに助けられたことがある。それは声かけだったり、行動だったりするのだが、なんだかホッとした。ほんの少しの言動が人を助けることもあるのだ。学校生活の中でも不満があったり、友達との関係でも嫌なことがあるとどうしてもネガティブになり、気持ちも下がりがちになる。怒りが先行してしまいそうになることもある。でも、そんなときは、一息おいて考えたい。私にできることはないか、私がホッとさせる存在になれるかということだ。人はみんないいところも悪いところも色々あってその人なのだ。だから人生の中で成功も失敗も経験するし、それをかてにして成長もする。色々な人と関わり意見が違っても、受け入れ認める努力をすることや寄りそうことで、お互いを大切な存在であると思える信頼関係を築いていきたいと思う。そうやって一人一人が大切にされる存在だと実感できれば、いじめの防止や、犯罪や非行の防止にもつながるのではないかと思う。

私はこれからも、困っている誰かや、孤独と戦っている誰かがいたら積極的に声をかけたり、勇気を持って手を差し伸べたいし、素敵なことをしている誰かがいたら感謝の言葉を伝えたい。そうすることでもたくさんの人とつながって、社会を明るくする未来に貢献できると思うからだ。私たちができることに限界はない。未来は私たちが自分たちで作っていくものだから。きっとそこには明るい希望があると信じて。

京都府推進委員会委員長（京都府知事） 賞
愛情のバトン

京都府・京都市立洛北中学校 三年 尹ゆん輝ひい相さん

僕は人を殴ってしまったことがある。気がついたら手が出てしまっていた。相手に嫌な態度をされて、自分が抑えきれなかった。その後、先生に呼び出されてしまった。「なんで殴ったりしたんだ」と先生はいう。「あいつがバカにしたような態度をしたから」と僕は答えた。「たしかに相手も悪いけど、殴るのは良くないよな」と叱られた。お母さんにも連絡がいつていたようで、学校から帰ってまた怒られた。たしかに、殴ったのは僕だ。でも、僕をバカにする相手の態度は許せない。その時、僕は手を出したことで怒られることに納得がいかなかった。

その後、この気持ちが変わることがあった。夏休みの宿題で「社会を明るくする」の作文の参考として先生が教えてくれた鉄拳さんの動画を見たことだ。動画の少年は、両親が喧嘩をしたことで、不安な気持ちになって非行に走った。タバコを吸ってみたり、悪い仲間とつるんだりするなかで、人を襲おうとしたところを警察に捕まり、保護司さんの助けのもと社会に復帰することができた。

僕はこの動画を見て、愛情をもって接してくれる大人の存在が大事なのだと感じた。僕が殴ってしまったとき「なんで怒られないといけないんだ！」と納得がいかなかったが、考えてみれば嫌な事をされたからといって手を上げるのはやりすぎだ。怒られても仕方がない気がする。先生や母さんが僕を叱ったのは、僕を大切に思ってくれているからなのだと思うようになった。

もし僕に怒ってくれる人がいなければ、僕は嫌なことをされるたびに殴ってしまう人になっていたかもしれない。僕が大人になって誰かを殴ってしまったら、僕は捕まってしまうかもしれない。そん

なことが起こらないためにも、お母さんや先生は怒ってくれたのだと思う。僕のことを一番に考えて愛情を持って叱ってくれたのだ。

世の中にはそういうことをしっかり教えてくれる大人が周りにいない子どももいるだろうし、鉄拳さんのパラパラ漫画の少年のように身近な大人を信じるのができなくなつて非行に走ってしまうような子どももいるはずだ。子ども達が何か間違つたことを起こしてしまつた時に大切なのは、愛情を持って接してくれる大人の存在だと思う。親や先生は身近な大人だが、動画の中に出てきた保護司さんも、非行をしてしまつた人たちに愛情をもって接してくれる大人だ。そういう存在が僕たちみんなに必要なと思う。とはいえ、みんながみんな、そのような大人に出会えるとは限らない。どうすれば、みんなが愛情を受けられるようになるかはこれからの課題だろう。

いつかテレビで深夜に繁華街に集まる若者たちのニュースを見た。寂しさや不安を掲げて、みんなが集まっているのだという。社会の悪だとして、その若者たちはその場所から追い出されてしまつてた。でも、ニュースで見た若者たちに必要なのは、繁華街から追い出されることじゃなくて、愛情を受けることなのだと思う。たしかに、若者のたまり場は怖くて危険な感じがする。だが、それは彼らが十分な愛情を受けていると感じられないからだと思う。

僕は社会に生きる人々がみんな、「誰かに愛情を持って接する人」になればいいと思う。みんなが愛情をもち、みんなが愛情を受けるのだ。そんな愛情の連鎖が人々の孤独や不安を和らげ、非行に走ったり、犯罪に手を染めたりすることを予防する。そして、誰かがもし、悪いことをしてしまったときに社会に復帰する道も開くことができるように思う。

ここまで僕たちには愛情を持って接してくれる大人が必要だと話してきたが、大人になって愛情を持って接してくれる人の存在は必要だろう。ついカッとなったときにだめてくれる友達、落ち込んでいるときに話しかけてくれる友達、困ったときに相談に乗ってく



れる友達、大人にとってのそういう存在に僕たち自身がなることもできるはずだ。僕は今年で十五歳になった。まだまだ子どもだけど大人たちを支えることだってできるだろう。先生や母に愛情を伝えるのは恥ずかしいけど、悩みや話を聞いてあげることから始めてみようと思う。

僕が人を殴ってしまったときに僕を叱ってくれた先生やお母さんのような存在にみんながなる。追いつくじゃなくて、叱って、愛情を伝えるのだ。社会に生きるみんなが愛情を誰かに与える。そして、そのバトンを繋いでいく。これが僕の考える「社会を明るくする運動」だ。

